



第120号

たからの山

伊賀教区 西蓮寺山主 武田 圓 寵

「寶珠」と題するこの誌は、私たちの宗祖真盛上人のご幼名「寶珠丸」にちなんでいますね。真盛上人の母君が夢の中で地藏菩薩から「寶珠」を頂き、それをのみ込んだときに、真盛上人がお生まれになったということから、その名を「寶珠丸」と名付けられたということです。

また、この「寶珠」は、妙法蓮華經五百弟子授記品の衣裏繫珠に出てくる話の寶珠でもあります。

この話では、ある貧しい男が友人の家に行き、酒を飲んでぐっすり寝入ってしまった。友人は次の朝、早く出かけなければならなかったため、その貧しい男を助けようと、男のマントのへりに寶珠を縫い付け出で行った。男は目覚めて、衣服の中に寶珠があることを知らず、仕事を探して何年も困窮していた。その後、その男はかつての旧友に再会し、そこで初めて自分のマントのへりに寶珠が縫い付けられていることを知った。

このたとえ話は、私たちが仏の子であり、仏心（寶珠）を与えられているにもかかわらず、それを知らないままに、精神的には非常に貧しい生活を送っているということを教えています。

さて、真盛上人の念仏三昧ご法語の中で、「たからの山に入りながら、手を空しうしてかえるが

ごとし」というお言葉があります。ここで「宝の山」とは、仏の子として仏心（寶珠）を与えられているのに、それを知らないままに過ごしている私たちの精神世界です。ですから、真盛上人は念仏を唱えてこの宝の山にある仏心（寶珠）に気づき、手を空しうして帰ることのないようにと、願われたのです。なぜなら念仏を唱えるということ、自らが仏になりたいと願う心の表出であり、同時にすべての人が仏になってほしいと願う心の発露です。そしてその時、自らの心にある仏心に気づかせてもらえるのです。

ですから、私たちは自らの心にある仏心（寶珠）に気づかせてもらうために念仏を唱えましょう。そしてその仏心とは何かといえば、それは觀無量壽經の中で説かれている「仏心者大慈悲是」であり、大慈悲心のことです。

真盛上人の教えとは、現世においては私たちが安穩で平和に暮らしていくための教示であり、後世においては阿弥陀仏の西方浄土に往生させていただくための教導であります。

私たちはこの念仏を實踐し、仏心（大慈悲心）を利他のために輝かせ、そのことによって、安穩で平和で充実した一日一日を過ごしたいものです。

別派独立と

萬日法要

その2

伊勢教区 村主寺 色井 秀宰

3. 萬日法要の意義

日本の戦後社会、昭和三十年代から経済面の復興は大きく進み、東京オリピックと大阪万博の成功は、日本人としての誇りと自信を取り戻す契機となりました。そしてその誇りと自信は、爾後の高度成長への大きなエネルギーとなりました。

本宗の別派独立後の歴史も、似たような経緯をたどります。明治十一年の別派独立後、真朗上人は初代管長として真盛上人の教えを天下に広め門末檀信徒の心を一つにするため、様々な施策に取り組まれます。そして明治十四年の祖殿建築着手、十六年の慈撰大師号宣下と、徐々に一宗たる体裁を整え始めます。しかし、小教団たる悲しき、財政面での行き詰まりから祖殿の造営は中断し、十八年には本山の年末の支払不能という、極度の危機に直面しました。

その中、真朗上人は緊縮策の一方で、祖殿建築について自ら各地を巡化して門末に呼びかけられ、まさに身命を賭

してその意義を説かれます。祖殿建築の遂行を通じて、真盛宗徒たる誇りと信仰心の高揚を図り、そのエネルギーをもって活路を開こうとされたのです。同じ考え方は、十三萬日法要の早くも二年後、別派独立に先立ち独立後の施策として発表された「十四萬日法要見込案」にも表れています。門末の法要への主体的参画を促して、その誇りと信仰心の高揚を図る長期指針と言えるものです。

真朗上人の思いは、明治二十七年の祖殿の完成と十四萬日法要執行をもって叶います。その時、本宗は名実ともに一宗として確固たる地位を築いていました。

惜しむらくは、真朗上人ご遷化の二年後のことです。

4. 十九萬日法要にむけて

バブル崩壊で失いかけた日本人の誇りと自信は、2020東京オリンピックに向けて復活の兆しです。私たちが三年後に迫った十九萬日大法会の成就に向けて、真盛宗徒としての誇りと信仰心を、今一度高めていきたいものです。今日のわが宗の礎を築いていただいた真朗上人への、何よりの報恩として。

真盛上人往生伝記
にふれる

第5回

不断念佛

総本山西教寺において「不断念佛相続十九萬日大法会」が二〇二一年十一月にお勤めされることとなりました。

これは、真盛上人以来お念仏が絶えることなく続いていることを慶び、さらにお念仏が続いていくことを祈念して一万日、すなわち約二十七年に一度おこなわれてきた天台真盛宗にとつて最も重要な法要です。大法要としての記録は江戸時代に行われた「七萬日大法要」までさかのぼることができそうですが、真盛上人やその弟子たちの行状を伝える『真盛上人往生伝記』では「不断念仏」についてどのように述べられているのでしょうか？

『真盛上人往生伝記』では上巻の最後の部分において、不断念仏が行われた道場が列挙され、次に不断念仏の目的が説かれ、そして不断念仏を行う時に守るべき決まり等が説明されています。

その目的が説かれる個所の冒頭部分は、「右、長時修行、不断念佛の志趣

は蓋し以て……」と始められます。「右」というのは「列挙した寺々で行われた以上のような法要は」という意味であり、それらの寺々で行われた不断念佛は長時の修行（長い時間かけて行なう修行）であるとの箇所です。述べられています。さらにもう少し進むと「一念十念の功力、すべて窮尽すべからず。何に況んや、衆人多念の功德に於いておや。一日七日の行因なお勝計すべからず。何に況んや、長日不断の行業に於いておや。」と説かれます。これは「一回や十回の念仏の功德の力ですら尽きることがない程のものであり、多くの人々が多くの回数唱える念仏の功德については言うまでもなくそれをはるかに超えるものである。また、一日あるいは七日間行う修行による功德ですら数え上げることができない程のものであり、長い期間、絶えることなく行う念仏修行による功德はその比ではない。」という内容を意味します。つまり、不断念仏とは多くの人々が集まり、長い期間絶えることなく行われる念仏修行のことであり、今日私たちが言う別時念仏と同じ内容を指す言葉としてここで使われているといえるでしょう。

真盛上人はまさに「往生されんとする時に「相構えて無欲清淨にして能く念佛すべし。」という「御遺命（最期

に遺された教えのお言葉」に続けて「臨終の十念なり」とおっしゃり、鉦を鳴らして集まった弟子たちとともに数百遍のお念仏、つまり別時念仏をお勤めされながら往生されました。この御遺志を守り脈々と念仏の伝統を伝えて来たのが西教寺を中心とする天台真盛宗なのです。「不断念仏」すなわち別時念仏を続けていくことが私たちに与えられた最も重要な責務であり、それがそのまま真盛上人が示された救いの道であるといえるでしょう。

(文責 宗学研究所已講 市川直史)

明智光秀一族の菩提寺 西教寺

NHKは、二〇二〇年の大河ドラマに明智光秀公を主人公とした「麒麟がくる」に決定したと発表しました。

西教寺は、明智光秀公とその一族をお祀りしている菩提寺であることをご存じでしょうか？

元龜二年（一五七一）に織田信長による比叡山の焼き討ちが行われ、西教寺も全焼しました。その後、織田信長の命により、光秀公が坂本城を築城し、この一帯を支配しました。その際に、西教寺の復興に力を注いだのが光秀公です。光秀公の寄進による西教寺総門

をはじめ、梵鐘や書状など多くのゆかりのある品々が残されております。

その中でも、元龜四年（一五七三）

二月、光秀公が堅田城に拠った本願寺光佐を討った時の戦死者十八名の菩提のために、武将・足輕の隔てなく、亡くなった方への供養米を西教寺へ寄進されました。このことから光秀公は大変仏教帰依者であった事が伺われます。（その書状が大阪市歴史博物館にあずけられ保存されております。）

西教寺本堂前には、光秀公と妻熙子一族の墓もあり今日まで大切に祀りし、追善供養を行ってきました。

また、平成元年には、光秀公顕彰会を発足し、光秀公のお人柄や功績を広



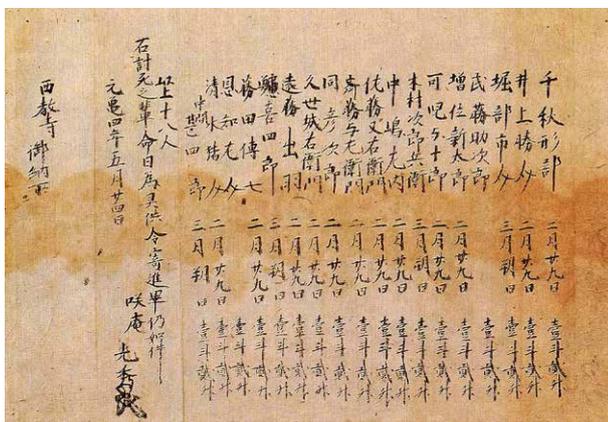
明智光秀公一族の墓

く伝える活動も行っており、現在では、光秀公の末裔や歴史家・光秀ファンなど約五〇〇人の会員があつまり、毎年六月十四日に光秀公を偲び、法要や顕彰事業を行っております。

西教寺では、光秀公ゆかりの品々を皆さまに順次公開し、展示や講演などを行っていく予定です。

拝観時に、希望があれば、光秀公や戦国武将と西教寺との縁や歴史についても説明させていただきます。

このように「明智光秀一族の菩提寺である西教寺」という違った趣でお参りいただいてはいかがでしょうか、皆様のご参拝をお待ちしております。



明智光秀公寄進状

天台真盛宗の雅楽

⑤

今回は弦楽器、琵琶（楽琵琶）と箏（楽箏）を案内しましょう。

まず、琵琶です。四弦で四つのフレット（柱）が有り二十の音を作ることができます。

黄楊製の撥で弹奏します。複数の弦を同時に引き鳴らすアルペジオ奏法が特徴です。

楽器の最後は箏です。世間ではお琴だけで流派が有るくらい馴染みのある楽器です。箏でも楽器の形態は、ほぼ同じで十三本の弦に柱を立てて調律し右手の親指、人差し指、中指に爪を付けて早掻、閑掻と言う奏法を主に弹奏します。

雅楽の演奏の中で今までに説明致しました鞆鼓、太鼓、鉦鼓、笙、篳篥、横笛は主たるメンバーですが、弦楽器が無くても雅楽演奏は行われます。

基本的には琵琶、箏は特殊な演奏形態以外やはり装飾音を担当します。しかし、弦楽器が入った管弦演奏は演奏に奥行きがあると申しましようか、より一層艶やかになります。



平成三十年度宗祖真盛上人鑽仰会

鑽仰法要・講演会及び 総会のご案内

とき 九月二十八日(金)十三時より
ところ 伊賀・西蓮寺

・宗祖真盛上人鑽仰会法要
・講演 講師 九品寺住職

別所泰広師
演題 「名号の解説と
別時念佛の実践」

本年の講演は、名号を御覧いただき講師による説明、その後、ご参詣の皆様には鉦鉦を使い実践して頂く予定です。

・総会

◎ 宗祖真盛上人鑽仰会は、平成二十四年に宗祖真盛上人のご遺徳を鑽仰し、宗祖真盛上人二十五霊場寺院・番外寺院・史跡寺院の充実をはかることを目的として設立されました。毎年一回、宗祖真盛上人鑽仰会法要を西教寺、引接寺、西蓮寺、西来寺の順に各寺にて厳修し、記念講演・総会も併せて開催し、教区毎に霊場寺院へ巡拝して宗祖の御教への研修、研鑽しております。

尚、年会費は一千円(会計年度七月一日〜翌年六月三十日)となっております。入会ご希望の方は菩提寺の住職までご一報下されば入会手続きを致します。ご入会をお待ち申し上げます。

菊料理のご案内

西教寺菊料理膳の9品。なます(上段中央)は叡山しめじ、一夜漬(下段中央)は草津のコマツナを合わせるなど湖国を中心に食材を吟味する。菊の花をつけ込んだ菊酒(中段右)は味がまろやかになり色もこはく色になる2、3年ものが主で、重陽の節句にも飲まれる。

大津市坂本の特産の食用菊を使った料理。菊寿司、菊なます、菊酒など菊づくし。

坂本では、昔より「菊を食べないと秋を迎えた気にならない」といわれるほど、松茸や栗より身近な秋の味覚のひとつなのだそうです。ここ西教寺では、鮮やかな色目と香り・しゃっきりとした食感の坂本菊(食用)を味わうことができます。

食前酒からデザートまで、すべて菊料理のフルコースは、この時期、この地でしか味わえないもの、目で、舌で、秋の坂本を満喫できます!

西教寺菊料理膳

(期間限定11月10日より30日まで!!)

菊料理の料金

「1膳2,500円(消費税・拝観料別)」

●要予約(必ずご予約申し込みを! 1日限定150席)

お申し込み/西教寺寺務所 大津市坂本5-13-1

TEL. 077-578-0013



団体参拝ありがとうございました

平素は、多数、檀信徒様の総本山への御登山、御参拝を賜り誠にありがとうございました。五月

御登山、御参拝を賜り誠にありがとうございました。	五月
平素は、多数、檀信徒様の総本山への御登山、御参拝を賜り誠にありがとうございました。	二十四日
伊勢教区笠松組浄泉寺様団体参拝	四十八名
今後共、各末寺の御住職、檀信徒様によりよいご参拝がいただけますよう拝観案内等の充実につとめてまいりますので、	二十五日
伊勢教区郷津組西方寺様団体参拝	四十二名
伊勢教区亀山組蓮光寺様団体参拝	二十七日
伊勢教区亀山組蓮光寺様団体参拝	二十七日

西村岡紹管長猥下 御退任について

この度、西村岡紹管長猥下におかれましては、平成三十年五月八日付をもちまして御退任されました。

平成十九年御就任より長年に亘り、宗門及び総本山の発展の為に、御尽力賜り、その御労苦に敬意を表します。

表紙写真説明

表紙は、西教寺総門下安養院内仏地蔵菩薩である。安養院は、恵心僧都源信に連なる安養尼の遺跡であった地に豊臣秀吉家臣中山城守長俊が再興した。その後、実業家で貴族院議員でもあった山口玄洞氏(一八六三〜一九三七)が、約百年前にあたる聖徳太子一三〇〇年、伝教大師最澄一〇〇〇年遠忌を契機に、更に堂舎整備された。それ以降安養院の四方の見事な眺望は訪問者を魅了させている。

発行所 天台真盛宗教学部

大津市坂本五丁目十三-1

総本山西教寺内

電話 大津(〇七七)五七八-〇〇一三番代

印刷所 宮川印刷株式会社

大津市富士見台三十八

電話(〇七七)五三三-二二四一番